

令和5年度 自己評価

1. 当園の教育目標

- 園での生活を通して、のびのびと遊ぶ楽しさや人と関わる喜びを十分に経験させることで、子どもたちの心を幸福感で満たし、情緒の安定した偏りの無い人格を形成する。
- 他人に受け入れられ認められる経験を通して、自己肯定感と感謝の気持ちを持てるよう導き、生きる力の基盤となる強い心を育む。
- 感情の行き違いや意見の衝突を経験することで、自分以外の人も自分と同様に大切な存在であることに気付くよう導き、他に対する思いやりや労りの心を育む。

2. 本年度重点的に取り組む目標・計画

◎ 満3歳児の受入を円滑に進める。

近年少子化の影響を受けて、3歳児からの園児募集では定員に相当する園児数を確保することが難しくなりつつある。一方で、保護者の意識は未就園児クラスや満3歳児入園など、より低年齢からの就園に向いており、早期に何らかの形で保育施設とつながることを志向している。このことを踏まえて、少しでも早いタイミングで、新入園児を迎え入れる方策をとることが園児確保のために必要であると考えます。

既に在籍している3歳児以上の園児の豊かな保育環境を担保した上で、満3歳児を受け入れ、保育を円滑に進めるため配慮すべきポイントを以下にまとめる。

- 1) 満3歳児の募集の方法と時期については、在籍園児の様子や、各クラスの保育環境の充実度と余力を見極め、無理なく受け入れられるように人数、時期、方法を設定する。
- 2) 満3歳児を3歳児学級に編入する形式でのクラス編成については、満3歳児だけで無く3歳児の保護者に対しても、不安を払拭し理解を得られるように説明する。
- 3) 満3歳児を受け入れることへの保育者の不安を軽減し、3歳児と同様に充実した保育を実践しようとするモチベーションを維持する。

◎ 要支援児だけでなく、その他の園児にも配慮した支援

要支援児とクラスメイトの子どもたち、双方にとって望ましい保育環境を確保するため、保護者や療育機関とも連携して、共通理解を図りながら適切な支援を追求する。

3. 評価項目の達成及び取り組み状況

- 1) 3歳児クラスの受入体制に見合った満3歳児の募集 A

新入園児が園に慣れたタイミングで、ごっこクラス在籍者に限定して募集した。2学期から3歳児クラスに2名ずつ編入という形で受け入れたか、ごっこクラスで園の環境に慣れた子どもばかりなので、大きな混乱も無く満3歳児受け入れ初年度としては、順調な始まりとなった。

2) 3歳児の保護者と満3歳児の保護者、双方の理解を得る。 B

当園の受入体制では満3歳児だけのクラス編成が難しいため、既存の3歳児クラスに編入という形で満3歳児を迎えることになる。このクラス編成に関しては、受け入れる側の3歳児の保護者、編入する側の満3歳児の保護者、どちらに対しても、クラス定員の枠内での編入であること。必用に応じて補助教諭が付き添い援助することを伝えて、理解を求めた。概ね好意的であったが、一部の保護者からは、満3歳児対応に保育者が注力し、他児に目が行き届かなくなることを懸念する声も聞かれた。

3) 満3歳児を迎える保育者のモチベーションの維持 A

事前にごっこクラス担当教諭から、詳細な引き継ぎ等の援助があったことで、初めて満3歳児を受け入れる保育者の不安は大幅に軽減でき、心に余裕を持ってモチベーション高く保育に臨む事ができた。

4) 要支援児とその他の園児にも配慮した適切な支援 B

一旦受け入れた要支援児であっても、当園の保育スタイルに沿うよう支援するのではなく、当該児にとってのストレスの少ない環境という観点から、一斉保育への不参加や、適正を考えての他の保育施設への転園等、保護者に提案し理解を得られるように力を尽くした。園が全てを引き受けるのではなく、療育機関と連携し、時には分担することで要支援児だけでなく、その他の園児にとっても充実した保育環境を守ることの重要性実感している。

5) 保護者との信頼関係の構築 C

園への要望や担任への不信感などを耳にすることが少なからずあった。相手が特定できる場合はその都度説明し、保護者の理解を得ることができたが、間接的に把握し得た内容については説明することも叶わず、納得のいく対応ができないため不本意であった。

4. 学校評価の具体的な目標や計画の総合的な評価結果 B

近年園児募集において3歳児の応募が減少傾向にあり、いよいよ今年の年少クラスはわずかではあるが定員を割ることとなった。昨今の出生児数の推移を見れば今後の募集状況が改善することは考え辛く、園児確保のためには満3歳児受入を始める必要があった。結果的には1学期の半ばからスロースタートとなったが、ごっこクラス在籍者に限定して募集し、円滑に満3歳児を受け入れての保育を展開することができた。初年度はいくつかの制限を設け少人数ではあったが、次年度からの本格的な募集に向けての下地が整ったと言える。受入体制の準備段階としては十分な成果を上げることができたと思われる。

依然として特別な配慮を必要とする園児への対応に加配教諭の援助と協力が欠かせない状況が続いている。様々な発達状況の子どもが混在するクラスにおいて、互いに影響を与え合いながら育つこと。相互に違いを受け入れ認め合う機会を大切にしたいとの考えから、要支援児に対しても他児と一斉に活動することを促してきたが、困難な場合もあり、やむなく分けることも必要であると思いついた。

そこで要支援児にとってどのような支援が必要か、最適な環境は何か、保護者と共通理解を図りながら療育機関へと繋げるよう努めた。園が支援を放棄するのではなく、当該児にとってより良い環境を提案し療育機関と連携、時には分担するという姿勢を保護者に示し理解を得ることが重要で引き続き取り組むべき課題である。

母の会主催の行事も復活し、職員が保護者に直接対面して親しく接する機会は増えているが、

コロナ禍以降、保護者との距離感は縮まらず、園の教育活動に対する理解を得られていないと感じることが多いが、今後も諦めずに親しく良好な関係性を築けるように努力を続けていく。

5. 今後の取り組むべき課題

○ 受入体制に見合った満3歳児の募集

満3歳児の募集状況により次年度のクラス編成と人員配置の見通しを立てて、受入体制に見合った過不足の無い満3歳児の募集を行う。

○ 保護者ニーズに対応できるごっこクラスの運営

少子化が進む一方で、満3歳児入園や様々な未就園児クラスなど、保護者にとっての選択肢は増えている。(満3歳児入園や複数の未就園児クラスの併用など) 保護者の多様なニーズに対応できるようごっこクラスの設定を工夫する。

○ 預かり保育の充実と効率的な運営

新2号認定児が増加傾向にある中で、受け入れ人数、設定日時など、保護者の多数派のニーズに見合った受入体制を整備し、効率的な運営に努める。

○ 園児減に対応できる経営体制

少子化の時代にあって、園児が減少しても安定した経営を続けるために、施設型給付を受けることを視野に入れて経営体制を見直す。

6. 学校関係者の評価

○ 令和5年度の自己評価の内容、全項目にわたって特に指摘すべき事項はなく、妥当であると認められる。

○ 重点的に取り組む目標や計画、評価項目について
適切に設定されており、園の取り組み内容がよくわかる。

○ 今後の課題、改善に向けた方策について

社会情勢を反映させた今後の園運営のための課題が明確に記されている。

仕事をする親の立場からは、預かり保育の充実(長期休暇中の設定日を増やすこと)を切望する意見を耳にするので、対応が必要かと思われる。

○ その他

特別支援を必要とする園児への対応については、よりきめ細やかであることを期待するが、同時にクラス毎の保育環境に格差が生じないための配慮が行き届くことを切に願う。